

『大乘掌珍論』 解題

——日本古写経伝承写本をめぐって——

何
歡
歡

The Jewel in the Hand:
On Some Old Japanese Manuscripts of a Buddhist Scripture

He Huanhuan

The *Jewel in the Hand* is one of the Indian Buddhist Scholar Bhāviveka's (ca. 490- 570) principal works that is only available in the Chinese translation of Xuanzang 玄奘 (600/ 602- 664). There it is titled the *Dasheng zhangzhen lun* 大乘掌珍論. The important position of this text in the intellectual history of Madhyamaka philosophy has been widely known; its French translation was published by de La Vallée Poussin in 1933, and a Sanskrit "reconstruction" by N. Aiyaswami Sastri was published in 1949. However, in contrast to Bhāviveka's other main works such as the *Madhyamakahr̥daya* and its autocommentary the *Tarkajvālā*, and the *Prajñāpradīpa*, not many studies on this Chinese translation of the *Jewel in the Hand* in two scrolls have been published to date.

Thanks to the *Old Buddhist Manuscripts in Japanese Collections* of the International College for Postgraduate Buddhist Studies, the *Online Culture Heritage* and the *Database of National Cultural Properties* organized by the Japanese Agency of Cultural Affairs, and the Nezu Museum, this paper is able to introduce and to analyze the main textual features of five Old Japanese Manuscripts of the *Jewel in the Hand* that have been preserved respectively in the Tokyo National Museum, the Nezu Museum, the Kongō-ji, the Kōshō-ji and the Nanatsu-dera, with their full or partial color copies at my disposal. Furthermore, I briefly discuss the similarities and differences among the manuscripts and xylographs of the editions of the Chinese canon that are available to me, that is, the Fangshan Stone Tripitaka and the Korean Tripitaka, etc., as well as the critical editions made by premodern Japanese and Chinese scholars.

Taking the *Jewel in the Hand* as an example, I seek to gain a further and, it is hoped, a better understanding of the ancient Chinese Buddhist manuscripts that are preserved in Japan-these are known as the Old Japanese Manuscripts-that were transcribed during the late *Nara* Period to the late *Heian* Period. Due to obvious limitations, I will not discuss in this essay Bhāviveka's arguments with certain Buddhist and non-Buddhist ideas that would otherwise give us a further insight into the many aspects of sixth century Indian intellectual history.

『大乘掌珍論』 解題 —— 日本古写経伝承写本をめぐって ——

何 歡 歡

一 はじめに

六世紀前半のインド仏教思想史において、画期的ともいえる役割を果たした論師にバーヴィヴェーカ (Bhavyeka 清弁/分別明、四九〇～五七〇頃) がいる。唐の玄奘 (六〇〇/六〇二～六六四) によって漢訳された『大乘掌珍論』(以下、『掌珍論』) は、バーヴィヴェーカが最後に著したと推定される作品である^①。同論は、ヴァスバンドゥ (Vasubandhu 世親、四〇〇～四八〇頃)、ディグナーガ (Dignaga/Dīna 陳那、四八〇～五四〇頃)、さらにダルマキールティ (Dharmakīrti 法称、六〇〇～六六〇頃) へと発展した経量部的な認識論および論理学の展開を考察する上でも、きわめて重要な意味をもつ。

『大乘掌珍論』というタイトルのサンスクリット原語については、従来 * [Mahayāna] Karatālaratna (de La Vallée Poussin)^②、あるいは * [Mahayāna] Talaratna (南条) という推定形が提示されてきた。ただし、ディグナーガ著の『掌中論』(義浄譯、真諦譯『解捲論』)、すなわちチベット語訳の音写語でも確認される * *Hastavālaprakarāna* という論書のタイトルを勘案するととも

に、漢訳「掌」がサンスクリット語 *hastā* とも対応することを考慮するとき、『掌珍論』のサンスクリット原語はむしろ * *Hastaratna* の方が意味深く、ふさわしいとも考えられようか。双方の成立年代を念頭に置けば、* *Hastaratna* は、* *Hastavālaprakarāna* が主張するディグナーガおよびそれ以前の瑜伽行派の学説を受け、それらの内容をも意識した上で、批判的な議論を展開したという関係になる。したがって、著作タイトルの寓意として、ディグナーガは自らの論理を「拳」に喩え、一方のバーヴィヴェーカはその「拳」を開けて、そのなかの「珍」、すなわち宝石を開示するという関係を意識したであらうか。『掌珍論』は、『中観心論』の第三「真実智の探求」章の構成と同様に、二諦説の観点から「有為空」と「無為空」の証明を展開し、有部に代表される伝統部派や瑜伽行派に加え、仏教内外の様々な学派の定説を批判する。* *Hastavālaprakarāna* と * *Hastaratna* の相互の呼称は、『掌中論』から『掌珍論』に至る教理的な関係を表題の寓意をもつて示しているとすれば興味ぶかい。^④

『掌珍論』は漢訳のみに伝承され、サンスクリット写本もチベット語訳も発見されていない。大正蔵の本文は標点符号を除きおよそ一四五〇〇文字で

ある。大正蔵以外の本文校訂は、一九二〇年代に中国の学者呂澂がチベット語訳の『中観心論』とも照合しながら、宋版思溪本を底本とし、高麗版再雕本と対校して作成した校訂本が、『蔵要』（第三輯）に収められている。^⑤ Aiyaswami Sasri は1949年に *Karatalartha* と題して漢訳からサンスクリット語への重訳本を出版した。^⑥ 一方また、de La Vallée Poussin は1933年に漢訳からフランス語訳を発表した。^⑦ その後、江島恵教他の研究者がそれぞれ部分的な研究を公にしている。^⑧ しかしながら、『掌珍論』の漢訳は内容的にも難解であり、テキストに関する研究も少ない。^⑨

二 日本古写経伝承写本 『掌珍論』

東アジアにおいて注目を集めてきたこの『掌珍論』は、玄奘の弟子達（神泰、元暉等）によって註釈書が作られたものの、『掌珍論』自体の写本は中国では散佚し、残されていない。刊本大蔵経が刊行される以前の写本は、残念ながら中国ではほとんど消滅してしまっ^⑩た。これに対して、日本には奈良時代から『掌珍論』の古写経が伝承されてきた。なかでも最古の写本は、七七二年に書写され、重要文化財として東京国立博物館に保存されている。他の奈良時代の一写本は、重要文化財として根津美術館が保存する。^⑪ これ以外の同論の平安期以降の写本は金剛寺、七寺、石山寺、興聖寺、新宮寺、妙蓮寺（松尾社）等の多くの寺院に残されている。

国際仏教学大学院大学日本古写経データベースにより、『掌珍論』の日本古写経の保存状況は以下の表に示されている。^⑫

経巻番号	巻次	聖蔵	金剛寺	七寺	石山寺	興聖寺	西方寺	新宮寺	妙蓮寺	その他
0737-001	巻上		△	△	○	○		△	○	
0737-002	巻下		△		○	○			○	

同データベースが記す○、△、×、の記号は経巻の状態（○…良、△…破損有、×…開卷不能）を表し、空欄は欠本であることを示す。すなわち、石山寺、興聖寺、妙蓮寺には、全二巻が良好な写本で保存されている。金剛寺本は全二巻に及ぶが、一部破損もある。七寺本および新宮寺本は上巻のみで、部分的に破損がある。

この他に、日本仏教関連の諸文献にも、『掌珍論』に関する多くの逸文が見出される。たとえば、『掌珍論』の論法に関しては、「掌珍比量」をめぐって法相三論の両宗の間で激しい論争が繰り広げされたことが延暦年間（八世紀末）の詔勅にうかがえる。奈良時代の日本では、正倉院文書の『厨子絵像并画師目録』が示すように、バーヴィヴェーカとその著作は三論宗に属するものと見なされた。^⑬ 幕末には、宝雲（一七九一—一八四七）が『大乘掌珍論發揮』と題する注釈書を著している。^⑭ このように、『掌珍論』の重要性は、日本の奈良時代から明治時代までの古写経と注釈にうかがうことができる。

以下では、日本の古写経に伝えられる『掌珍論』の写本の概要と特徴を示した上で、多少の考察を加えたい。

（一）根津美術館本

本写本は、一九四四年九月五日に、国の「重要文化財」（書跡・典籍）の指定を受けた『掌珍論』巻上のみの一写本であり、現在、東京都港区にある根

津美術館に保存されている。文化庁・国指定文化財等データベースには、巻上残巻の中の巻首一部と巻尾一部の写真が掲載されている。¹⁵ 筆者は幸いその全容を通覧でき、写真撮影を行ったのは、二〇一五年六月二五日の同美術館での調査時である。

根津美術館に所蔵される『掌珍論』は巻首一紙半ほどの本文を欠くため、経題を欠く。全体で十六紙が存し、末尾に「大乘掌珍論卷上」と記す。白質の斐紙で作られた卷子本であり、高さ三七・九センチ、料紙一六枚（幅四八三・三センチ）を貼り継いだ写本で、天地及び毎行に界線が施され、界高は三・五センチである。一紙には二七行、一行一七字前後の書写規格である。底本は不明であるが、巻末と紙背に「法隆寺／一切経」の墨方印を捺す。法隆寺一切経中の一巻であろう。

この古写経『掌珍論』は書写年代を欠くが、奥書には白い墨汁で書かれた「承和元年（八三四）読了」と「嘉祥二年（八四九）十月十五日一交勘了」などの後記が付されている。さらに、書体から奈良時代末期（七五〇年頃）に書写されたと推定される。本文の全面にわたって朱点が施されているほか、白い墨汁で書写された訓点と注釈は極めて稀であり、紙背にも朱白両様の註記がある。訓点には、書写時をさほど下らないと見られる白点と、それよりやや後れて、白点の上に書写された朱点がある。朱点は、白点と部分的には重なるが、白点をなぞったものではなく、別の訓法・異読を伝えていると考えられる。奥書により、白書の註記と、白書朱書の訓点が八三四年を上限とする時期に施されたものであることが知られる。

白書の訓点と註記については、廣坂直子・金水敏の研究によれば、「白点は胡粉を水で溶いたものによって付ける。伸びが悪く書きにくい、乾くと

拭き取ることができ、また自然に剝落することも多い。平安初期にはよく用いられたが、その後次第に用いられなくなった。同一文献に白点と朱点が付いていれば、一般には白点が古く朱点が新しいことが普通である。」¹⁶ という。したがって、これら朱白両様の訓点と註記は、奈良時代末期の古写経として伝承される根津美術館本『掌珍論』の一つの大きな特徴といえる。

（2）金剛寺本

大阪府の南、河内長野市にある真言宗御室派の古刹である天野山金剛寺は、聖武天皇（七〇一～七五六）の勅願により行基（六六八～七四九）によって開創されたのが始まりである。金剛寺には、平安末期から鎌倉後期にかけて断続的に書写された四五〇〇巻余りの「一切経」が所蔵されている。金剛寺一切経は、奈良時代の写経もしくはその転写本を底本として書写された一切経で、奈良・平安古写経の系譜に連なる日本古写経である。極めて貴重な仏教遺産であるが、その中に『掌珍論』の写本が存在する。

まず、金剛寺本『掌珍論』は、金剛寺一切経の特徴の一つでもあるが、平安時代後期以降に使用されるようになった組紐が付けられている。すなわち、「二間組の組織で柄は斜格子もしくは山路で、時代的にも極めて正統的である。」¹⁷ といわれ、『大般若経』以外のグループを見られる。ただし、組紐は基本的なものであり、書写年代にかかわらず、後代に付けられる可能性が高い。金剛寺本『掌珍論』は卷子本であり、全三巻が現存する。書写年代を欠くが、書体から平安期の書写と考えられる。それぞれの巻の表紙には墨書で「大乘掌珍論卷上／則函」と「大乘掌珍論卷下／則函」とある。写真からは料紙の材質は分からないが、上巻は十七枚を貼り継ぎ、下巻は十五枚を貼り継いである。さらに、天地及び毎行に界線が施され、各紙は二十八行、一行

十七字前後で書写されている。

この『掌珍論』写本には書写に関する奥書がなく、上巻には「〇交了」があり、下巻には「一交了」という校合奥書があるのみである。

(3) 興聖寺本

京都市上京区にある興聖寺は有名な古禅刹であり、現在は臨済宗興聖寺派の本山である。同寺の一切経は、平安末期に丹波国桑田郡小川郷（京都府亀岡市）にあった西楽寺で書写された一切経であり、その後、南山城の海住山寺（京都府木津市）に移り、慶長三年（一五九八）にその海住山寺から興聖寺にもたらされたものが中心となる。この一切経が興聖寺に移ってからは、開山の虚応円耳（一五五九～一六一九）禅師によって大切に保存され、数回にわたって補写・修復が行われた。

興聖寺一切経は六〇〇〇余巻現存し、ほぼ全体的に保存状況が良好であり、極めて貴重な資料として注目されている。興聖寺一切経の中には北宋勅版からの転写本も保存されるが、そのほとんどは奈良平安時代の転写本であり、唐代の長安仏教のテキストを反映していると考えられる。

その一切経の中にある興聖寺本『掌珍論』は折本であり、全二巻が現存している。天地及び毎行に界線が施されて、一行十七字前後の書写規格である。この古写経の上巻の末尾には「称〇交了」とあるが、下巻は奥書を持たない。書体その他の特徴により、本文は平安中後期（二〇〇～一一世紀）の書写と見られる。表紙には「大乘掌珍論卷上」の表題が銀字で書写されている。

(4) 七寺本

七寺は名古屋市中区門前町にあり、正式には稲園山正覚院長福寺という名の真言宗智山派の寺院である。天平七年（七三五）に行基によって正覚院が

創建されたと伝えられる。七寺という呼称の由来は、延暦六年（七八七）に河内権守の紀是広により七区の精舎、十二の僧坊からなる七堂伽藍が建立されたことによる。大震災や兵火により一時荒廃したが、仁安二年（一一六七）勝幡城主・尾張権守大中臣朝臣安長が娘の菩提を弔うため、婿であった豊後守親実と共に計らって寺を現在の稲沢市七ツ寺町に移し、七堂伽藍と十二僧坊も再建した。阿弥陀如来とその脇侍である観音菩薩・勢至菩薩を奉納し、寺名を稲園山長福寺と改めるとともに、一切経奉納も発願し、安元元年（一一七五）正月から治承二年（一一七八）八月までの四年間に一切経を書写させた。

「七寺一切経」の特徴の一つである朱の天地界線は、『掌珍論』にも引かれている¹⁸。七寺本『掌珍論』の料紙は黄色を呈しているが、多くの写経と同様に黄檗（学名 *Phellodendron amurense*）で染められていると考えられる¹⁹。表紙には表題として「大乘掌珍論卷上」の文字が銀字で書写されている。この古写経は卷子本である。全二巻のうち上巻が現存しているが、料紙十七枚を貼り継いだ写本であり、天地及び毎行に界線が施され、一紙は二十六行、一行十九字前後の規格で書写されている。

さらに、七寺本『掌珍論』の巻上の末尾に「一校了 栄俊」がある。校訂者として記され栄俊は、栄芸とともに一切経の書写事業を取り仕切って、多くの仏典の校訂を担当している。栄俊は、尾州長嶋郡長福寺の住持栄芸の弟子である。師弟で平安時代の末期、安元元年（一一七五）から治承二年（一一七八）にかけて、『貞元録』²⁰に基く一千二百三十八部五千三百五十一巻の経巻の大半を書写したといわれる。

(5) 東京国立博物館所蔵本（以下、「東博本」）

東博本『掌珍論』は、現存する最古の写本ということになる。一九三七年五月二五日に、国の「重要文化財」（書跡・典籍）の指定を受けた。現在、文化庁が所有者として、東京国立博物館・文化庁分室に保存されている。残念ながら、筆者はその全容を通覧できていない。文化庁・国指定文化財等データベースに、巻首と巻尾一部の写真が掲載されている。²¹ 公開された情報によれば、書写年代は室龜三年（七七二）正月廿五日であり、さらに天曆九年（九五六）三月四日觀理已講という白書の注記がある。

(6) 諸古写経『掌珍論』の書誌一覧と比較考察

以上に紹介した『掌珍論』の五つの古写経の書誌情報と特徴を対照すると、次のようになる。

	東博本	根津美術館本	金剛寺本	興聖寺本	七寺本
巻数	巻上	巻上残	全二巻	全二巻	巻上
書写年代	七七二年	七五〇年頃	一〇〇〇年頃	一〇〇〇年頃	一一七五年頃
品質	紙本墨書	紙本墨書	紙本墨書	紙本墨書	紙本墨書
装幀	卷子本	卷子本	卷子本	折本	卷子本
字詰	一行二〇字前後	一行一七字前後	一行一七字前後	一行一七字前後	一行一九字前後
奥書	アリ	アリ	アリ	巻上アリ 巻下ナシ	アリ
印記	ナシ	法隆寺一 切経	ナシ	ナシ	ナシ
訓点	ナシ	白書	ナシ	ナシ	ナシ

以上の古写経諸本『掌珍論』は、版式、料紙、字様など外見上異なるところが多いが、論典本文の内容を見ると、全体としてほぼ一致する。また、高

麗蔵本や磧砂蔵本などの刊本大蔵経とのテキストと較べても、基本的には一致している。²²

ただし、文字の異同（異体字）が多い点は注目される。紙幅の制約もあり、校訂本の作成は別稿に委ねざるをえないが、これらの異体字は書写上のあるいは時代的な特徴を示すといえるが、現時点で確認される異体字の過半は、教理解釈や思想理解に直接関わるとは考えられない。

一例として、(A) 経題の「珍」の字がある。大正蔵には校勘記は見られないが、金剛寺本などの日本古写経諸本は異体字（俗字）の「珍」を用いている。

次にまた、(B) 金剛寺本・興聖寺本・七寺本が「无」、「辦」という異体字（略字・通字）を出すのに対して、根津美術館本と刊本大蔵経はそれぞれ本字の「無」、「辯」を用いている例などもある。

以上の(A)(B)は異体字（俗字、略字・通字）の例であるが、『掌珍論』の古写経諸本と刊本大蔵経とを比較するとき、教理的に最も重要な意味をもつと考えられる異読の一つが「空」と「宗」、さらには「令」と「今」に関するは誤写である。以下ではその典型例を、大正蔵本とその脚注情報、日本古写経、ならびに他の刻本および刊本大蔵経で検証したい。

大正蔵本・若他遍計所執有爲、就勝義諦、實有自性、今立爲空、且如眼處一種有爲、就勝義諦、辯其體空。空與無性虛妄顯現門之差別、是名立宗。
 『大正蔵』1578, vol. 30, 268c17-19)

この中の「今立爲空」の「空」については、大正蔵本の脚注によると、

宋・元・明三版は「宗」の読みである。すなわち、思溪資福藏本・普寧藏本・嘉興藏本は、すべて「今立爲宗」と表すという²³。

これに対して、日本古写経の諸写本の当該箇所²⁴の読みは以下の通りである。

根津美術館本…欠。

金剛寺本…若他遍計所執有爲、就勝義諦、實有自性、令立爲空、且如眼處
一種有爲、就勝義諦、辦其體空。空○无性虚妄顯現門之差別、是名立宗。
興聖寺本…若他遍計所執有爲、就勝義諦、實有自性、令立爲空、且如眼處
一種有爲、就勝義諦、辦其體空。空與无性虚妄顯現門之差別、是名立宗。
七寺本…若他遍計所執有爲、就勝義諦、實有自性、令立爲空、且如眼處一
種有爲、就勝義諦、辦其體空。空与无性虚妄顯現門之差別、是名立宗。

さらにまた、筆者が確認した刻本および刊本大藏経は以下のような読みを採る²⁴。

房山石經、趙城金藏、高麗藏（初・再）…「令立爲空」。

宋版磧砂藏…「令立爲宗」。

明版永樂北藏、清版龍藏…「今立爲宗」（今令）。

明版洪武南藏、民国版藏要…「今立爲宗」。

「空」と「宗」、「令」と「今」は文字の形が多少なりとも似るため、誤写された可能性が高い。内容と文脈から判断して、この箇所は古写経の金剛寺本、興聖寺本、七寺本、ならびに房山石經、趙城金藏、高麗藏（初・再）が

採る「令立爲空」が適切であると考えられる。ここには、「令立爲空」√「今立爲宗」√「今立爲宗」√「今立爲空」というような転写上の変化なし誤写の跡を窺うことができる。

近年の古写経研究の成果により、奈良写経が中国・唐代の經典の諸相を忠実に伝えるものであること、さらに平安・鎌倉時代の写経がその奈良写経の転写本であることが明らかになっている。奈良時代以降に書写された一切経に含まれる『掌珍論』に関しては、根津美術館本・金剛寺本・七寺本・興聖寺本に限定して言えば、刊本大藏経とほぼ同系統の内容を伝承していると思われるが、上記の「令立爲空」が例証するように、貴重な学術的意義を持つと考えられる。

三 おわりに

バーヴィヴェーカは、中期および後期中観派に属する他の論師とは異なり、東アジアの仏教世界においてよく知られたインド中観思想家である。唯識説を批判する一方で、インド中観派を名実ともに基礎づけた論師である。そのバーヴィヴェーカの真作であることが確定している『掌珍論』は、その重要性にも関わらず、漢訳にやや難があることと、独自の論法を用いて初期のインド哲学諸学派の学説を含む多岐に及ぶ論題を扱っていることもあって、本格的な研究が待たれる状況にあった。従来のインド仏教関連の研究は、ややもするとサンスクリット語テキストおよびチベット語訳に偏りがちであったが、少なからぬ量の漢訳文献は、経論の古い時代の内容を伝承し、あるいはまた原典も他の翻訳も欠落する古い時代の経論を今に伝えている。とくに、

それらの中の貴重な文献のいくつかは、『掌珍論』が典型であるように、日本の奈良・平安時代の古写経にのみ伝承されている。『掌珍論』もその一例であるが、日本古写経のもつ意義が、今日、東アジアの思想文化史という広い視野からあらためて具体的に検証されつつある。

日本の奈良・平安古写経に伝承され、多くの関連文献に引用・言及される『掌珍論』の信頼できる校訂テキストと訳注研究を公にすること、『掌珍論』が伝えるバーヴィヴェーカの中観思想と当時の仏教諸部派ならびにインド哲学諸学派との論争の跡を実証的に考察することが可能になる。『掌珍論』の中国と日本における受容と解釈、および思想史上の影響に焦点をあて、玄奘がインドから写本を将来し翻訳した時点から今日に至るまでの歴史的な経緯を辿りながら、信頼度の高い校訂テキストに基づいて、『掌珍論』に込められたバーヴィヴェーカの論理と思想を分析する作業については、別稿を期したい。

註

- (1) バーヴィヴェーカには、主著の『中観心論』、ナーガールジュナ (Nagarjuna 龍樹、一五〇～二五〇頃) 作『中論』に対する注釈『般若灯論』、および『掌珍論』の三つの代表作が知られている。サンスクリット語あるいはチベット語訳が伝承する前二者については、これまでも多くの研究が重ねられてきた。特に、『中観心論』と『掌珍論』の関係については、総じて『中観心論』が『掌珍論』に先行することは確定している。ただし、『掌珍論』が二箇所で言及する「入真甘露」(*Tattvāntarāvatara) が、はたして『中観心論』全体の別称か、その中の前半部(第一章から第五章まで)を指すのか、あるいはまた「相應論師」(瑜伽行派)の学説を批判的に考察する第五章のみを指す呼称なのかは明瞭で

はない。斎藤明「『中観心論』の書名と成立をめぐる諸問題」『印度學佛教學研究』第五三卷第二号、八三八～八三二頁参照。

(2) 「ディクテナーガ」のインド原語について、拙稿「陳那の名称をめぐる」『國際仏教学大学院大学研究紀要』第二〇号、一六三～一八二頁参照。

(3) La Vallée Poussin, L. de, "Madhyamaka", *Mélanges Chinois et Bouddhiques*, Tome II, Bruxelles: Institut Belge des Hautes Études Chinoises, 1933, p. 61. Nanjio Bunyū, *A Catalog of the Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka*, Oxford: At the Clarendon Press, 1883, no. 1237, p. 272.

(4) Huanhuan He & van der Kuip, "Further Notes on Bhāviveka's Principal Oeuvre", *Indo-Iranian Journal* 57-4, 2014, pp. 301-302.

(5) 『藏要』は中華民国十八年(一九二九)から、南京にある支那内學院が刊行された仏教大藏經の選輯である。歐陽竟無、呂澂『藏要』(全十冊)上海書店、1991年。

(6) N. Aiyaswami Sastri, *Karatalaraha, or, The jewel in hand: a logico-philosophical treatise of the Madhyamaka school = Chang-chen lun*, Visva-Bharati, 1949.

(7) La Vallée Poussin, L. de, *ibid.*, pp. 1-146.

(8) 江島惠教「『大乘掌珍論』の瑜伽行学説批判」『インド学仏教学論集』高崎直道博士還暦記念論集』春秋社、1987年、二〇一～二四頁。光川豊芸「『大乘掌珍論』管見—中観・瑜伽交渉における一視点として」『印度學佛教學研究』第一三卷第二号、一七〇～一七五頁参照。

(9) 近年、『大乘掌珍論』を扱った博士論文(英文)が提出された。Chien Y. Hsu, *Bhāviveka's Jewel in the Hand Treatise: Elucidating a Path to Awakening Utilizing Formal Inference*, Unpublished Dissertation, University of Calgaly, 2013. Fong, Lai, Yan, *The Proof of Emptiness—Bhāviveka's Jewel in the Hand*, Unpublished Dissertation, Durham University, 2015.

(10) 刊本大藏經には『掌珍論』が収められている。例えば、開寶藏 No. 614、崇

- 寧藏 No. 616⁷ 毘盧藏 No. 617⁷ 圓覺藏 No. 625⁷ 趙城金藏 No. 621⁷ 資福藏 No. 630⁷ 磧砂藏 No. 636⁷ 高麗藏 No. 620⁷ 普寧藏 No. 628⁷ 洪武南藏 No. 563⁷ 永樂南藏 No. 1370⁷ 永樂北藏 No. 1284⁷ 嘉興藏 No. 1229⁷ 乾隆藏 No. 1231⁷ 中華藏 No. 670⁷ (金藏廣勝寺本)。房山石經の『掌珍論』は一〇九三年頃書かれ、巻上に、「計三百四十字、共十七紙碑九条、孟士端書」との奥書がある。
- (11) 文化遺産オンラインと国指定文化財等データベース(文化庁)：<http://bunkanri.ac.jp/heritages/detail/211139>、<http://kunshitei.bunka.go.jp/bsys/main-details.asp>、2017年10月18日確認。
- (12) http://koshakyodatabase.icabs.ac.jp/p02_canonlist.seam、2017年10月18日確認。
- (13) 師茂樹「清辨比量の東アジアにおける受容」『불교학연구(仏教学研究)』八、二九七―三二二頁参照。
- (14) 宝雲『大乘掌珍論發揮・上』永田文昌堂、明治三三―三四年。国会図書館デジタルコレクション：<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/816847>、2017年10月18日確認。
- (15) 文化庁・国指定文化財等データベース：<http://kunshitei.bunka.go.jp/bsys/photolist.asp>、2017年10月18日確認。
- (16) 廣坂直子・金水敏「国仏本『摩訶止観 巻第一』について」『ごとくら』(国際仏教学大学院大学) 第八号、2012年、三頁参照。
- (17) 道明新一郎「金剛寺一切経の紐」『いとくら』(国際仏教学大学院大学) 創刊号、九頁参照。
- (18) 「七寺一切経」の筆頭におかれる『大般若経』六百巻については縦横いずれの界線も朱で引かれている。中国・北宋時代の写経にこの『大般若経』写本に見られるような朱の界線を用いる例があることから、このような朱の界線は北宋時代の写経の影響を受けていると考えられている。赤尾栄慶「七寺一切経にみる経軸の意匠の相違について」『ごとくら』(国際仏教学大学院大学) 第三号、三頁参照。

- (19) 吉川也志保「古写経の色」『ごとくら』(国際仏教学大学院大学) 第三号、五頁参照。
- (20) 落合俊典「毘羅三昧経と初期訳経」『印度學佛教学研究』第四二巻第二号、五七九頁参照。
- (21) <http://kunshitei.bunka.go.jp/bsys/photolist.asp>、2017年10月18日確認。
- (22) 趙城金藏本は冒頭部分に乱丁がある。
- (23) 宋版の底本は芝増上寺所蔵の思溪資福藏本であり、元版の底本は芝増上寺所蔵の普寧藏本であり、明版の底本は芝増上寺所蔵の嘉興藏本である。
- (24) 中國佛敎協會編『房山石經』(遼金刻經 20) 華夏出版社、2000年。『趙城金藏』(No. 621) 北京圖書館出版社、2008年。高麗藏(初・再)：<http://ksutra.felk>、2017年10月18日確認。『影印宋磧砂藏經』(No. 636) 上海宋版藏經會、民國22-25年(1933-1936)。『洪武南藏』(No. 563) 北京圖書館出版社、1999年。『永樂北藏』(No. 1284) 線裝書局、2000年。『乾隆大藏經』(No. 1231) 世權國際股份有限公司、2003年。

【付記】

根津美術館本の閲覧に当たっては、根津美術館の関係者と国際仏教学大学院大学の齋藤明教授にご協力いただいた。なお、金剛寺本と興聖寺本と七寺本の複写をご提供いただいた落合俊典教授はじめ国際仏教学大学院大学及び日本古写経研究所の関係者の皆様には格別のご配慮を頂戴した。記して感謝の意を表したい。

また、本稿は日本学術振興会外国人特別研究員(二〇一五―二〇一七年)としての研究成果の一部である。